夢十夜

夏目 漱石

第一夜

こんな夢を見た。

腕組みをして枕もとに座っていると、仰向きに寝た女が、静かな声でもう死にますと言う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の柔らかなうりざね顔をその中に横たえている。真っ白な頬の底に温かい血の色がほどよくさして、唇の色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますとはっきり言った。自分も確かにこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上からのぞきこむようにして聞いてみた。死にますとも、と言いながら、女はぱっちりと目を開けた。大きな潤いのある目で、長いまつ毛に包まれた中は、ただ一面に真っ黒であった。その真っ黒な瞳の奥に、自分の姿が鮮やかに浮かんでいる。

自分は透きとおるほど深く見えるこの黒目の艶を眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、懇ろに枕のそばへ口をつけて、死ぬんじゃなかろうね、だいじょうぶだろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い目を眠そうにみはったまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、しかたがないわと言った。

じゃ、私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかいって、そら、そこに、映ってるじゃありませんかと、にこりと笑ってみせた。自分は黙って、顔を枕から離した。腕組みをしながら、どうしても死ぬのかなと思った。

しばらくして、女がまたこう言った。

「死んだら、埋めてください。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして天から落ちてくる星の破片を墓標に置いてください。そうして墓のそばに待っていてください。また会いに来ますから。」

自分は、いつ会いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちていくうちに、——あなた、待っていられますか。」

自分は黙ってうなずいた。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待っていてください。」と思いきった声で言った。

「百年、私の墓のそばに座って待っていてください。きっと会いに来ますから。」

自分はただ待っていると答えた。すると、黒い瞳の中に鮮やかに見えた自分の姿が、ぼうっと崩れてきた。静かな水が動いて映る影を乱したように、流れ出したと思ったら、女の目がぱちりと閉じた。長いまつ毛の間から涙が頬へ垂れた。——もう死んでいた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘った。真珠貝は大きな滑らかな縁の鋭い貝であった。土をすくうたびに、貝の裏に月の光がさしてきらきらした。湿った土の匂いもした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土を、上からそっとかけた。かけるたびに真珠貝の裏に月の光がさした。

---

4 【うりざね顔】瓜の実のように面長でふっくらとした顔。

5 【真珠貝】真珠を産する貝類。

それから星の破片の落ちたのを拾ってきて、かろく土の上へ乗せた。星の破片は丸かった。長い間大空を落ちている間に、角が取れて滑らかになったんだろうと思った。抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖かくなった。

自分はこけの上に座った。これから百年の間こうして待っているんだなと考えながら、腕組みをして、丸い墓石を眺めていた。そのうちに、女の言ったとおり日が東から出た。大きな赤い日であった。それがまた女の言ったとおり、やがて西へ落ちた。赤いまんまでのっと落ちていった。一つと自分は勘定した。

しばらくするとまた唐紅の天道がのそりと昇ってきた。そうして黙って沈んでしまった。二つとまた勘定した。

自分はこういうふうに一つ二つと勘定していくうちに、赤い日をいくつ見たかわからない。勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日が頭の上を通り越していった。それでも百年がまだ来ない。しまいには、こけの生えた丸い石を眺めて、自分は女にだまされたのではなかろうかと思いだした。

すると石の下からはすに自分のほうへ向いて青い茎が伸びてきた。見るまに長くなってちょうど自分の胸のあたりまで来て止まった。と思うと、すらりと揺らぐ茎の頂に、こころもち首をかたぶけていた細長い一輪のつぼみが、ふっくらと花びらを開いた。真っ白な百合が鼻の先で骨にこたえるほど匂った。そこへはるかの上から、ぽたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花びらに接吻した。自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたった一つ瞬いていた。

「百年はもう来ていたんだな。」とこのとき初めて気がついた。

1 【かろく】軽く。
8 【唐紅】鮮やかで濃い紅色。
8 【天道】太陽。
14 【はす】斜め。
18 【接吻】「キス」の古い言い方。

第四夜

広い土間のまん中に涼み台のようなものを据えて、その周りに小さい床几が並べてある。台は黒光りに光っている。片隅には四角な膳を前に置いてじいさんが一人で酒を飲んでいる。さかなは煮しめらしい。

じいさんは酒のかげんでなかなか赤くなっている。そのうえ顔中つやつやしてしわというほどのものはどこにも見あたらない。ただ白いひげをありたけ生やしているから年寄りということだけはわかる。自分は子供ながら、このじいさんの年はいくつなんだろうと思った。ところへ裏のかけいから手おけに水をくんできた神さんが、前垂れで手を拭きながら、

「おじいさんはいくつかね。」ときいた。じいさんはほおばった煮しめを飲み込んで、

「いくつか忘れたよ。」とすましていた。神さんは拭いた手を、細い帯の間に挟んで横からじいさんの顔を見て立っていた。じいさんは茶わんのような大きなもので酒をぐいと飲んで、そうして、ふうと長い息を白いひげの間から吹き出した。すると神さんが、

「おじいさんのうちはどこかね。」ときいた。じいさんは長い息を途中で切って、

「へその奥だよ。」と言った。神さんは手を細い帯の間に突っ込んだまま、

「どこへ行くかね。」とまたきいた。するとじいさんが、また茶わんのような大きなもので熱い酒をぐいと飲んで前のような息をふうと吹いて、

「あっちへ行くよ。」と言った。

「まっすぐかい。」と神さんがきいたとき、ふうと吹いた息が、障子を通り越して柳の下を抜け

2 【涼み台】軽く外で涼むために使う腰掛け用の台。
2 【床几】簡易な腰掛け。
4 【煮しめ】野菜や肉をじっくり煮込んだ料理。
6 【ありたけ】ありったけ。思う存分。
8 【かけい】水を引くために、竹などで作られたもの。
8 【前垂れ】衣服が汚れないよう、腰から膝ぐらいまでを覆う布。

て、河原の方へまっすぐに行った。

じいさんが表へ出た。自分もあとから出た。じいさんの腰に小さいひょうたんがぶら下がっている。肩から四角な箱を脇の下へつるしている。浅黄のももひきをはいて、浅黄の袖なしを着ている。足袋だけが黄色い。なんだか皮で作った足袋のように見えた。

じいさんがまっすぐに柳の下まで来た。柳の下に子供が三、四人いた。じいさんは笑いながら腰から浅黄の手拭いを出した。それを肝心よりのように細長くよった。そうしてじびたのまん中に置いた。それから手拭いの周りに、大きな丸い輪を描いた。しまいに肩にかけた箱の中から真鍮でこしらえたあめ屋の笛を出した。

「今にその手拭いが蛇になるから、見ておろう。見ておろう。」と繰り返して言った。

子供は一生懸命に手拭いを見ていた。自分も見ていた。

「見ておろう、見ておろう、よいか。」と言いながらじいさんが笛を吹いて、輪の上をぐるぐる回りだした。自分は手拭いばかり見ていた。けれども手拭いはいっこう動かなかった。

じいさんは笛をぴいぴい吹いた。そうして輪の上を何遍も回った。わらじを爪立てるように、抜き足をするように、手拭いに遠慮をするように、回った。怖そうにも見えた。おもしろそうにもあった。

やがてじいさんは笛をぴたりとやめた。そうして、肩に掛けた箱の口を開けて、手拭いの首を、ちょいとつまんで、ぽっと放り込んだ。

「こうしておくと、箱の中で蛇になる。今に見せてやる。今に見せてやる。」と言いながら、じいさんがまっすぐに歩きだした。柳の下を抜けて、細い道をまっすぐに下りていった。自分は蛇が見たいから、細い道をどこまでもついていった。じいさんはときどき「今になる。」と言ったり、「蛇になる。」と言ったりして歩いていく。しまいには、

「今になる、蛇になる、
　きっとなる、笛が鳴る、」

と歌いながら、とうとう川の岸へ出た。橋も舟もないから、ここで休んで箱の中の蛇を見せるだろうと思っていると、じいさんはざぶざぶ川の中へ入りだした。初めは膝ぐらいの深さであったが、だんだん腰から、胸のほうまで水につかって見えなくなる。それでもじいさんは

「深くなる、夜になる、
　まっすぐになる。」

と歌いながら、どこまでもまっすぐに歩いていった。そうしてひげも顔も頭も頭巾もまるで見えなくなってしまった。

自分はじいさんが向こう岸へ上がったときに、蛇を見せるだろうと思って、蘆の鳴る所に立って、たった一人いつまでも待っていた。けれどもじいさんは、とうとう上がってこなかった。

第六夜

運慶が護国寺の山門で仁王を刻んでいるという評判だから、散歩ながら行ってみると、自分より先にもうおおぜい集まって、しきりに下馬評をやっていた。

山門の前五、六間の所には、大きな赤松があって、その幹が斜めに山門の甍を隠して、遠い青空まで伸びている。松の緑と朱塗りの門が互いに映り合ってみごとに見える。そのうえ松の位置がいい。門の左の端を目ざわりにならないように、はすに切っていって、上になるほど幅を広

3【浅黄】薄い黄色。
3【ももひき】下着または作業着にする、ズボンの形をした衣服。
3【袖なし】袖のない羽織。
6【肝心より】観世より。細長い紙をひものようによったもの。
6【じびた】地面。
8【真鍮】銅と亜鉛の合金。
8【あめ屋の笛】江戸時代から明治時代にかけて、街頭で商売をしていたあめ売りが持っていた、ラッパのような形の笛。チャルメラ。

11【蘆】水辺に生える、ススキのような形の草。
14【運慶】鎌倉時代の仏師。東大寺金剛力士像などを残した。
14【護国寺】東京都文京区にある寺。
14【仁王】仏法の守護神。寺の門の両側に置かれる。
15【下馬評】第三者があれやこれやと批評すること。
16【間】長さの単位。一間は約一・八メートル。
16【甍】かわら。
18【はす】斜め。

く屋根まで突き出しているのがなんとなく古風である。鎌倉時代とも思われる。
ところが見ているものは、みんな自分と同じく、明治の人間である。そのうちでも車夫がいちばん多い。辻待ちをして退屈だから立っているに相違ない。
「大きなもんだなあ。」と言っている。
「人間をこしらえるよりもよっぽど骨が折れるだろう。」とも言っている。
そうかと思うと、「へえ仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえそうかね。私ゃまた仁王はみんな古いのばかりかと思ってた。」と言った男がある。
「どうも強そうですね。なんだってえますぜ。昔から誰が強いって、仁王ほど強い人あないって言いますぜ。なんでも日本武尊よりも強いんだってえからね。」と話しかけた男もある。この男は尻をはしょって、帽子をかぶらずにいた。よほど無教育な男とみえる。
運慶は見物人の評判には委細頓着なく鑿と槌を動かしている。いっこう振り向きもしない。高い所に乗って、仁王の顔のあたりをしきりに彫り抜いていく。
運慶は頭に小さい烏帽子のようなものを乗せて、素袍だかなんだかわからない大きな袖を背中でくくっている。その様子がいかにも古くさい。わいわい言ってる見物人とはまるでつり合いがとれないようである。自分はどうして今時分まで運慶が生きているのかなと思った。どうも不思議なことがあるものだと考えながら、やはり立って見ていた。
しかし運慶のほうでは不思議とも奇体ともとんと感じえない様子で一生懸命に彫っている。仰向いてこの態度を眺めていた一人の若い男が、自分のほうを振り向いて、
「さすがは運慶だな。眼中に我々なしだ。天下の英雄はただ仁王と我とあるのみという態度だ。あっぱれだ。」と言って褒めだした。

2 【車夫】人力車を引く人。
3 【辻待ち】人力車などが道端で客を待つこと。
9 【日本武尊】ヤマトタケルノミコト。古代の伝説上の英雄。
11 【委細】詳しい事情。
11 【頓着】気にかけること。
11 【鑿】木や石などに穴をあける道具。
11 【槌】ものをたたく道具。ハンマー。
13 【烏帽子】昔、成人した男性がかぶった帽子。
13 【素袍】麻地で作られた、男性の和服の一種。

自分はこの言葉をおもしろいと思った。それでちょっと若い男のほうを見ると、若い男は、すかさず、
「あの鑿と槌の使い方を見たまえ。大自在の妙境に達している。」と言った。
運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の歯を縦に返すやいなやはすに、上から槌を打ち下ろした。堅い木をひと刻みに削って、厚い木くずが槌の声に応じて飛んだと思ったら、小鼻のおっ開いた怒り鼻の側面がたちまち浮きあがってきた。その刀の入れ方がいかにも無遠慮であった。そうして少しも疑念をさしはさんでおらんように見えた。
「よくああむぞうさに鑿を使って、思うようなまみえや鼻ができるものだな。」と自分はあんまり感心したから独り言のように言った。するとさっきの若い男が、
「なに、あれはまみえや鼻を鑿で作るんじゃない。あのとおりのまみえや鼻が木の中に埋まっているのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだから決して間違うはずはない。」と言った。
自分はこのとき初めて彫刻とはそんなものかと思いだした。果たしてそうなら誰にでもできることだと思いだした。それで急に自分も仁王が彫ってみたくなったから見物をやめてさっそくうちへ帰った。
道具箱から鑿と金槌を持ち出して、裏へ出てみると、せんだっての嵐で倒れた樫を、薪にするつもりで、木びきにひかせた手ごろなやつが、たくさん積んであった。
自分はいちばん大きいのを選んで、勢いよく彫り始めてみたが、不幸にして、仁王は見あたらなかった。その次のにも運悪く掘りあてることができなかった。三番めのにも仁王はいなかった。自分は積んである薪をかたっぱしから彫ってみたが、どれもこれも仁王を隠しているのはなかっ

3 【大自在】思いのままであること。
3 【妙境】芸術や技芸などの極めて優れた境地。
4 【寸】長さの単位。一寸は約三センチメートル。
6 【怒り鼻】小鼻が横に広がった形の鼻。
8 【まみえ】眉。
16 【樫】暖かい地方に生える常緑高木。
17 【木びき】丸太をのこぎりでひいて製材すること。また、それを仕事とする人。

た。ついに明治の木にはとうてい仁王は埋まっていないものだと悟った。それで運慶が今日まで生きている理由もほぼわかった。

〈出典『夏目漱石全集10』（筑摩書房、一九八八年）〉

【著者】**夏目 漱石**（なつめ そうせき）
一八六七（慶応三）年―一九一六（大正五）年
作家。東京都の生まれ。
【著書】『こころ』『草枕』『それから』など